

法堂（教えを説くためのお堂）の断食をする仏陀像

高座の前にある石像は、歴史的な仏陀である釈迦牟尼が断食をしている様子を模ったものです。やせ細った姿の釈迦牟尼は目を閉じ、脚を結跏趺坐にして組んで座っています。窪んだ腹と浮き出たあばら骨が断食の苦難とそれを引き受ける僧たちの決意を物語ります。お祈りをする6人の仏僧が像の台に彫り込まれています。

この像は、パキスタンのラホール博物館に収蔵され、そこで国宝に指定されている像のレプリカです。オリジナルの像は、インド亜大陸で紀元前180年から紀元前10年までの間に栄えた、古代ギリシャ芸術とインド仏教芸術の融合したガンダーラ芸術の貴重な例として考えられています。この時代の彫刻や芸術品は中国や韓国を経て日本へと辿り着きました。

こちらの像はオリジナルの像の唯一公式なレプリカとなっています。2005年の愛知万博で展示された後、パキスタン政府によって建長寺へと寄付されました。像は貴重で重要な芸術品であり、釈迦牟尼の初期の描写に写実的な古代ギリシャ彫刻の影響があったことを示しています。